

第2章 (2014年 税の年)

「税」に直面して、「税」について考えさせられた年

(公益財団法人 日本漢字能力検定協会発表から)

2014.1.5 田舎暮らし促進策 今日神戸新聞から

兵庫県内では但馬や淡路、播磨北・西部などに過疎や少子高齢化が深刻な地域が多い。何とか人を呼び込もうと、こうした地域を抱える市町の多くが「外部」の住民を対象に、移り住んできた場合にさまざまな費用を補助するなどの定住促進策に取り組んでいる。

⇒市町などの支援メニューは、地元の空き家・土地の情報を集めて希望者に提供する「空き家バンク」や、移住者を対象にした住宅新築費用の一部助成▽通勤、通学費の補助▽就労支援一など。移住しなくても、飲食店などを開く際の改修費補助など多くのメニューがあるが、実際に過疎の市町への移住促進は進んでいるのだろうか。

空き家を他人に賃貸したいと考える人は、家財道具等の廃棄・整理が大変。神さま(神棚)、仏さま(仏壇)の移動や、賃貸するための家屋の修繕も大変。

一方、賃借で入居したいと考える人は、以前どんな人が住んでいたか、なぜ、空き家になっているのか、家賃は?…などいろいろな気になる。

田舎暮らしに注目する人は多くても、実際に田舎に定住する意思が固まらない。人間の生活空間として魅力ある地域社会(文化施設、商店、病院、介護施設、就労先、学校、特に高校進学

など)が、ある程度揃っていないと田舎暮らしは増えない。若者が田舎から都会に流出する理由もそこにある。

市町による田舎暮らし定住促進政策のために必要なことは補助メニューの多さではなく、地域の生活のファシリティは、コンパクトで、十分ではないが、人情味厚く、魅力ある田舎だと自慢でき、地域住民として温かく受け入れる田舎の許容があることだ。北播磨の田園都市はその要件を十分備えている。

2014.2.4 日経歌壇から 日経2/2

今日のこのためこれまできたのだと思えてもなお時は止められず (枚方 山下文王) 選者:岡井隆

選者評:「今日のこのため」の今までの歩みと試みてみてもそれで終わらないのが人生だ。

⇒今まで何回も「今日のこのため」と頑張ってきた。それが終われば、また新しい次の「このための目標」を立てた。

最近では「もう頑張らないことにしよう」と心がけ、健康に留意し、日々の幸せに感謝している。

「今日のこのため」の今までの歩みと試みてみてもそれで終わらないのが人生だから、いつまでも頑張らないで、毎日の小さな幸せをエンジョイしたいと考えているからである。

「緩やかに回復してゐる」といふ景気感することもなく歩く路地裏 (松山 吉岡健児) 選者:岡井隆 選者評:なし

⇒情景描写が絶妙だ。ところで、高齢者は、若い時の勤務状況の違いで受給する年金が、厚生年金、共済年金、国民年金などと異なり、受給金額が大きく異なる。仕方のないことだとわかっていても「緩やかに回復してゐる」といふ景気を他人事のように感じる人は多い。中小零細事業者の景気も同じ。

働き盛りの若い人や、中小零細事業者に伝えておきたい。可能な範囲で、私的年金や公的共済年金をも掛けておこう。これは「将来への贅沢であり投資だ」。

2014.2.9 今日の日経歌壇から

GDP横綱目指す国ありてカド番みたいな日本

(松山 園部 淳)

選者：岡井隆 選者評：この場合は「カド番大関」がんばれと励ます外あるまい。

⇒GDP世界ランキング(名目、10億USドル)は、1位アメリカ16,244.58 2位中国8,221.02 3位日本5,960.27 4位ドイツ3,429.52 5位フランス2,613.94 である。

GDP世界ランキング(1人当たり、名目、USドル) 1位ルクセンブルグ106,406.42 2位カタール104,755.81 3位ノルウェー99,170.20 4位スイス78,880.93 5位オーストリア67,304.47 日本は12位46,706.72だ(出典はいずれもIMF —World Economic Outlook Databases 2013年10月版)。

ただ、数字をよく見ると順位は歴然としていて「GDP横綱目指す国ありて」は中国のようだが、中国がアメリカに追いつく日は遠い。「カド番みたいな日本」も、当分ドイツに抜かれることはないだろう。

2014.2.16 今日の日経歌壇から

この不況長引くものか町工場に子飼ひの社員と日々を励むも

(東京 川邊源一) 選者：岡井隆 選者評：なし

⇒私が税理士となって、会計事務所を開いて45年になる。この間、この歌にあるような多くの町工場にも関与してきた。子

飼ひの社員は、ご子息であったり、ご親戚の方であったり、中学や高校から斡旋されて就職してきた社員であったりする。

一応会社では社長とは呼ばれているが、社員から見れば、厳しいがやさしい親方である。その社長も従業員のどちらもが一緒になって、この不況長引くものかと日々励んでいる。この状態が10数年続いてきたのだ。

私の知る中小零細工場の現場の情景をよく表している。アベノミクスで景気回復なんて嘘だ。賃金上がるなんて嘘だ。それでも毎日、社長も社員も、手を真っ黒にしてアナログの機械と格闘している。

地方の、中小零細工場の、社長や従業員にアベノミクスの波及による不況脱出が届くことを心から期待し、今後の事業の継続と繁栄を応援したい。

2014.4.6 朝日歌壇から(朝日3/31)

衰いとう字に一本の棒足してしみじみ人は衰えてゆく

(福島市 美原凍子) 選者：馬場あき子 選者評：なし

⇒「かなしい」という漢字は、悲しい・衰しい・愛しいの三つがある。広辞苑第六版には、「自分の力では及ばないと感じる切なさをいう語。悲哀にも愛憐にも感情のせつないことをいう」と書かれている。

古希を過ぎ、病気を重ねて、泣きたくなるほどつらい経験をした。加齢による身体の衰えは本当につらい。健康寿命を迎えたころから起こる身体の劣化・生活の質QOLの低下は、個人差があり一概には言えないが、多くの人が人知れず苦しんでいることだろう。私の場合、筋力低下により歩行に難儀している。

10年くらい前までは、ひとり歩きでは最高800メートル、階段

は2階まで上がった。今では、左側に手すりや壁などがあれば30メートルくらい、階段は、手すりがあれば何とか2階まで上がれるが、大抵はエレベータがないと困る。

私はこの日が来ることを早くから予測していたので、スイミングプールでの水中歩行、クロールや背泳ぎの真似事をして、もうすぐ10年になる。最近は週4回、1回50分、ふらふらになりながら頑張っている。頑張っても体力が回復するわけでなく悔しい思いだ。

小さい時から今日まで、不自由ではあったが特に哀しいことも、衰えを感じることもなく過ごしてきた。今は加齢とともに、「哀しいとう字に、一本の棒足してしみじみとおのが衰えを感じる」。今後とも、多くの方々に迷惑をかけるがよろしくお願ひしたい。

2014.4.7 今日の日経歌壇から

畑やめ田圃もやめて田舎の兄はひとりになりて農地手放す
(さいたま市 田中ひさし) 選者：馬場あき子 選者評なし
⇒わが国の65歳以上の高齢人口は2012年初めに3,000万人を超え、今年中には14歳以下の子どもの人口の2倍を超える。

65歳以上の高齢者が人口に占める割合（高齢化率）も昨年9月に25%を上回り、4人中1人が高齢者となった（日経経済教室4/4）。

だれも経験したことがない未曾有の少子・高齢化という構造問題にあらがうのは難しいが、高齢人口の増加に伴って発生する社会問題への対応は喫緊の課題だ。その一つが農業従事者の高齢化による離農。

定年退職後、兼業農家から専業農家になり田畑の耕作に従事

する人は多い。その後、子が就業のため都会に住み、配偶者の協力がなくなり、畑や田圃をやめて、やがてひとり百姓となり、不本意な安い価格で農地を手放す。どこの田舎にでもある光景だ。

私が田を手放さない理由は、父がソ満国境の守りに出征の際、陸軍の給金を貯め、自宅に送ってきた仕送りで祖父母が買っておいた田があるからだ。圃場整理完了直後に10アール当たり200万円以上で売買されていたが、父が命を削って買った田は、いまは専業農家に使用貸借で耕作してもらっている。

農地転用規制で、買手もなく、借り手もない農地が日本国中に散在し、耕作放棄地となって社会問題化している。農業承継者がなくなった調整区域内の農地は、宅地転用が難しいだけでなく、売買も、賃貸借も難しい。以下今日の日経から。

調整区域内農地の岩盤規制に風穴が空くと期待されているのが農業特区。このたび兵庫県養父市で実施されることとなった農地を流動化する規制緩和、独立した行政組織である農業委員会が持つ農地売買などの許可権限を市に移す画期的改革だ。

最大のポイントは市農委への権限移譲だ。農地を戦略的に集約することや、農業生産法人の役員要件を緩和し、農家と企業やJ Aとの連携を後押しすることになるのだろう。この成果が養父市だけにとどまらず、日本国中に広がることを期待したい。

2014.5.5 今日の朝日歌壇・うたよむから

若者よこの辛き世からを生き延びよ怒れ泣けそしてしんそこ笑へ
(一ノ関忠人)

若者への強いメッセージを込めたこの歌は、若者を鼓舞しているだけのものではない。大病を患い現在も闘病中の作者が、生

の尊さの実感に基づいて詠っている。自己の生に向きあいながら、生きてゆく人への慈愛に充ちた愛情を詠っているものでもあるだろう。

⇒戦国武将の物語を読むと「生きること・生き伸びること」に智謀戦略の限りを尽くす場面に何度も遭遇する。今を生き延びれば、その後に栄達の道が開けるという功利主義的人生観が見え隠れする。

戦争のない国の、平和な時代に生きる若者にあるのは、この辛き世の認識でもなく、生き延びることに期待するその後の栄達でもなく、普通の生活の中にある怒り、悲しみ、苦しみさえ乗り越えればよいという日常的安堵感だ。

しかし、これは間違いだ。小学生、中学生までは身体を鍛え、高校・大学で勉強して知識を得、社会に出てから後は、就職、結婚、子育て、家族を守り、老いては、しんそこ笑って逝きたい。「若者よ、生き伸びよ」というのはこういうことだ。

傍白

思い出したことがある。大学時代に2年間余り関西学院教会の日曜礼拝に通った。そこで、関西学院中等部初代校長の矢内正一先生から聞いたことだが「私の知人に、小さいときから秀才と呼ばれた男がいる。彼は、周囲の期待通り、東京大学を出て中央官庁の役人になって順調に出世した。ところが、40歳で急死した」。先生曰く、「40やそこらで死んだらあかん。社会に出てから、家族を守り、社会のお役に立つために一番大切なのは強い身体だ」。

私が、「小学校、中学校では強い身体づくりに励め」というのは、矢内先生のお言葉が心に強く残っているからだ。2歳半でポリオに罹病し、生涯歩くことには不自由であったが、強い身体

のおかげで何とか及第点をいただける歳まで生きることができた。今はもう十分な体力は残っていないが、普通の小学校、中学校で級友や先生に支えられ、不自由な足を鍛えたことが「私の生き延びる原点」だった。強い体力が当たり前などというのは、恵まれた一部の人のことだ。病気やけがや事故で不本意に命を失うこともあるが「生き延びる原点」は強い身体だと改めて思う。

2014.5.11 ハンセン病研究 今日朝日から

今日の朝日新聞が全国ハンセン病療養所入所者協議会（全療協）会長 神美知宏さんの死去を報じている。神さんは全国13療養所の入所者の処遇改善や、偏見と差別のない社会を求める運動の先頭に立った。

ハンセン病は「らい菌」によって起こる細菌感染症。治療法が確立される以前は、恐ろしい病気とみなされてきたハンセン病だが、現在では1回の投与でらい菌の99.9%を死滅させる治療法が確立、一旦治療を始めた患者からほかの人に感染することはなく、後遺症が残っている、かつて重度の患者だった人からも感染することはない。現在でもこの治療法は効果的で、らい菌の感染力を短期間で失わせるため、ハンセン病は完全に治癒する病気となった（日本財団のHPから）。

⇒2011年11月、京都大学名誉教授の泉孝英先生から突然、事務所に電話があり「私はいま、日本の現代医学に貢献した人の辞典を作っている。ついては、西村真二先生の没年を教えてください」「ネットで検索していたらあなたのHPに、『西村の祖本家で父の従兄に当たる西村真二』という記述がありましたので…」という電話をいただいた。もちろん、すぐに没年をお知ら

せし先生から丁寧な礼状をいただいた。

西村真二さんからは生前に、父のところに昭和40（1965）年日本らい病学会賞（桜根賞）の受賞記念の記録「私のらい研究」や、大阪大学教授退官記念講演会の記録が届いている。著書の多くは、鼠癩、鼠癩感染実験など鼠らいに関するものである。現代のハンセン病研究の基礎を築かれたひとりに数えられている立派な方だと改めて知った。私の関西学院大学入学の保証人でもあった。

あらゆる「社会の偏見と差別のない社会」を求める運動の陰には、偏見と差別の元となる病気そのものの治療法を確立した多くの研究者の努力があり、罹病の撲滅を支援する民間団体がある。全世界のハンセン病撲滅を支援している日本財団、全世界のポリオ撲滅を支援している国際ロータリークラブなどの運動を知るとともに、神美知宏さんのようなハンセン病関係者による「偏見と差別のない社会」の運動に理解を示さなければならぬ。

2014.5.17 加東市代表監査委員退任

2014年5月17日を以て、加東市代表監査委員の職を任期満了により退任することとなった。2期8年、ともに監査を実施した他の監査委員の方々並びに関係職員の研鑽とご協力に感謝いたします。

2006年3月20日、旧加東郡3町が合併し加東市となり、初代市長の山本廣一様、第2代市長の安田正義様のご推挽により代表監査委員を拝命、加東市の行財政の監査に従事できたことを大変うれしく思います。

1969年、28歳で税理士を開業、1986年、45歳で自治体（旧滝

野町）代表監査委員に就任し自治体監査委員28年を務めた。

関西学院大学・同大学院で受けた恩師の学恩に心から感謝している。商学部の教養課程では、小島男佐夫教授（簿記論）深津比佐夫講師、後に教授（財務諸表論）、専門課程や大学院に入ってから、ゼミの先生でもあった青木倫太郎教授（管理会計、監査論）や、増谷裕久教授（会計学、税務会計論）、末尾一秋教授（原価計算論、予算統制論）の講義は、生涯を通じて私の心の糧となった。

青年時代を過ごした大阪、西宮など都会での華々しい仕事はできなかったが、故郷の田園都市で、税務会計の仕事ができたこと、家族を持ったこと、自治体監査委員を務めることができたことに感謝し父や母にも報告したい。

【加東市代表監査委員退任ご挨拶】

平成26年5月17日を以て、加東市代表監査委員の職を任期満了により退任することとなりました。2期8年、ともに監査を実施した他の監査委員の方々と関係職員の研鑽とご協力に感謝いたします。

微妙に異なる旧3町の決算書の審査から始まり、11件の住民監査請求がありました。

住民監査請求に係る要件審査、審査、請求人陳述、執行機関陳述を経て、結果の通知と公表を行い、却下10件、棄却1件（この内、住民訴訟に至ったもの2件、いずれも市側勝訴）の結果となりました。これらに関連する市議会議員の質疑には、議長の要請により市議会や委員会に出席し意見を述べました。

このほか第1期、2期を通じて、常に、市の財産や債務に重点を置き、適正な予算執行、法令順守、特に財務書類の形式遵守に留意し、地方自治法199条第1項に定める監査委員の基本的

な職権限である「地方公共団体の財務に関する事務の執行及び地方公共団体の経営にかかる事業の管理」において、監査を実施、併せて、地方自治法199条第2項に定める行政監査を実施しました。

※財務に関する事務とは、地方自治法の「財務」の章に定める支出、契約、財産管理等の事務を指すが、法解釈上その原因となった「先行事務」も含む。

これらの監査の経緯は「監査調書」を作成・保存、監査委員全員の合議により意見書を作成・公表しました。「監査調書」は、市職員のだれもが閲覧できるように「庁内ネット」に入れていただきました。

第2期目には、識見監査委員を1名増員していただき、監査の充実につとめ、長い間の懸案であった「加東市監査基準・平成25年4月24日・監査委員訓令第1号」を制定、例規集への記載により公表することができました。

毎回、決算審査終了後に、関係職員にご出席いただき監査講評を行い、個別、具体的な指摘事項や意見のほか、以下の内容について意見を申し上げました。

平成18年度から平成19年度までの決算審査講評・総評

- 1) 歳入歳出計算書の計数確認(18年は旧社町、滝野町、東条町を含む)
- 2) 公有財産、市債権の精査と計数確認、指標の検討

平成20年度決算審査講評・総評

- 1) 市税収入は歳入の根幹であり、財源の確保と負担の公平を期するため、課税客体の的確な把握に基づいた賦課と効率的な徴収に取り組み、収入未済額の減少に一層の努力を期待する。

- 2) 税の不納欠損処理については、市の定める処理の方針に基づき、適正かつ厳正な取扱いを要望する。安易に時効による不納欠損処理を行うべきでないのは当然であるが、すでに時効の完成したもので翌年度に収入未済額として繰り越すことは問題である。

また、市税の滞納ばかりでなく、利用料、使用料という市の債権の滞納額をも含め、市が「処理の方針」、例えば「市税滞納処理の基準」「債権管理基準」をはっきりと定めないと不納欠損処理ができない。「公金全般の不納欠損事務管理マニュアル」を作成すること。

平成21年度決算審査講評・総評

- 1) すべての収入未済額の内容の検討と不納欠損について精査
 - 2) 基金運用の基本方針を聴取し、現状を精査
 - 3) 繰り入れ、繰り出し基準、特に、一般会計と特別会計(企業会計を含む)間の繰り入れ、繰り出し基準の精査
 - 4) 水道事業会計と下水道事業会計の未収入金の不納欠損処理
- 平成22年度決算審査監査講評・総評

- 1) 職員研修(Education)について
- 2) ファシリティ・マネジメント(Facility Management)について
- 3) パブリシティ・マネジメント(Publicity Management)について

平成23年度決算審査講評・総評

- 1) 自治体の内部統制(Internal control)について
- 2) コンプライアンス(Compliance)について
- 3) ディスクロージャー(Disclosure)について

平成24年度決算審査講評・総評

自治体ガバナンスとマネジメントについて

地方自治体のガバナンス（統治・監視）は、①議会制度 ②関連法規 ③職員（公務員制度）の3つの条件や要素が十分機能することによってその成果を上げることができる。

議員が自治体のガバナンス機能を発揮すること。ガバナンスを可能とするルールである関連法規の完備と徹底遵守すること。さらに自治体職員が適正に行政執行をしているか、無駄や不公正の是正や排除を行っているかどうかを検証し、効率的でよいガバナンスを目指さなければならない。

自治体監査委員は、自治体経営（マネジメント）と経営監視（ガバナンス）の双方に大きな影響を及ぼしている。監査委員やその事務局職員による監査は、「監査委員の専門性と独立性により、監査委員監査が実質的な外部監査機能」を発揮することが期待されている（第29次地方制度調査会報告）。

しかし、現実の自治体監査委員監査は、法制度において、その選任機関や方法、議会選出委員の存在、事務局員のあり方など自治体監査委員の外見的独立性は確保されていない。

このような状況の中ではあるが、私たち監査委員は自治体監査委員として、現行法の範囲内で、できる限りのガバナンス機能を発揮してきた。

加東市合併から2期8年の任期中に（初めから意図したことでないが）「加東市監査のカタチを作ること」から始まり「自治体マネジメントとガバナンス」に至るまで、監査委員監査を通じて関与させていただいたことをうれしく思います。

また、任期中に、健全化判断比率及び資金不足比率に係る審査の導入や、地方公営企業会計規則の大改正（2014年度予算から新会計基準の適用）自治体の会計方式の統一（2014年に新方

式をつくり全国の自治体に導入を求める）がありました。

最後に、後任の監査委員や事務局職員にお願いしたいことを申し述べます。

- 1) 監査委員は、常に行政事務に高い関心を持って監査に臨んでいただきたい。
 - 2) 事務局職員は、業務に精励し研究を怠らないこと。監査委員やその補助者である事務局職員が、監査対象業務に疎いようなことがあってはならない。事前研究は監査の必須事項であることを肝に銘じておきたい。
 - 3) 監査委員は、監査を受ける職員に簡潔、明瞭に監査（質問、閲覧、実査など）の意図を説明し、謙虚に相手の説明を聞き、納得が得られるまで「監査証拠の妥当性、合理性」を追求すること。
 - 4) 市の財産・債務について、「資産の実在性と負債の網羅性」に留意すること。市の予算執行に力点を置いて監査を行うことは重要であるが、市の正味財産（財産－債務）の把握を見失うことがあってはならない。
- 監査委員監査の要諦は「市民への説明責任」だと考える。例月検査、定期監査、決算審査の実施のたびごとに意見を公表するのはもちろんのこと、住民からの監査請求、住民訴訟にも丁寧に対応し、公正不羈の立場で意見を述べるのが重要です。
- 皆さまのおかげで、加東市代表監査委員の職を任期満了により退任することができることに感謝いたします。

2014.5.18 今日の日経歌壇から

キラキラのご飯おむすび握りずし炭水化物は悪者なのか

（直方 石井真久良） 選者：三枝昂之

選者評：炊き上がったご飯は見た目も格別。にぎり寿司も芸術品。石井さんはそれでも悪者？と疑問を挟みながらのお米讃歌が楽しい。

⇒若者に白めしを推奨して「白めしくらい安くてうまい主食はない。茶碗一杯の白めしは食後のコーヒーの半分以下の価格。コメ農家さんありがとう」と書いたことがある。

ご飯と塩だけのおにぎりこそが日本の食文化の原点。日本の米は短粒種で粘り気があるのが特色。従って、長粒種米のようにバサバサにならない。昔から「江戸っ子の白飯食い」という言葉もあるほどだ。

ところが、最近、穀類などの「炭水化物」が悪者にされる。(財)高尾病院理事長の江部康二医師が提唱した「糖質制限ダイエット」だ。これは同氏の著書「主食を抜けば糖尿病は良くなる」(東洋経済新報社)で有名になった。肥満や糖尿病の治療に糖通常主食(穀物)は摂取できないが、血糖値を上昇させない肉や魚は、たっぷりたべてよい。蒸留酒であれば、アルコールもOK(京都・高尾病院のHPから)。

文藝春秋14年6月号では、大特集「医療の常識を疑え」医師が体験した『糖質制限ダイエット』(桐山秀樹稿)では「糖質制限を実践せず、批判するより、まずは自分の体で試してみた医師たちの声に耳を傾けてもらいたい」捉えているから、肥満、糖尿病などのダイエットにはコメ炭水化物は悪者なのだろう。

しかし、キラキラご飯は最高。寿司の美味しさはネタより銀シャリにある。最近、海外でも日本食ブームで白飯文化が理解されるようになってきたが、コメ消費の増加、コメ輸出の増加の原点は「白飯文化」の世界的普及だ。

2014.6.1 今日の日経歌壇から

気が付けば遺品となるべきものなどなき安物買いを吾はかなしむ (川崎 新一雄) 選者：穂村 弘 選者評なし

⇒30年前に父が亡くなったとき、父の叔母さんから、「遺品のメガネが欲しい」と言われた。変なものが欲しいのだなと思ったが、父が生前、身に着けていたものが欲しかったのかもしれない。

妹たちに「95歳になる母が亡くなった時に何が欲しいか」と尋ねると「何もいない」という。遺品となるべきものなどなきことを知っているのだろうか。

父も母も「悲しむほどの安物買い」ではなかったと思うが、高価なものは何もあまい。特に、資産家の家には必ずある美術品、骨董品、貴金属など何もない。床の間の掛け軸とて贋作か、安物だろう。趣味や関心がなかったのか、カネがなかったのか。たぶん、高価な美術品など買う勇気がなかったのだろう。

私は、平穏に毎日を過ごしているが、すでに平均健康寿命を過ぎていて。子や孫に何を残しておくべきか。

小野加東ロータリークラブの会報に、内藤正克会員が「高齢人生の基礎(3K)は、1. 財(カネ) = 老後の資金(経済問題) 2. 身体(カラダ) 健康問題 3. 心(ココロ) 安らぎと感動(精神問題)だ」と述べ、「人の値打ち(もし残すとすれば)は、金を残すは下の値打ち(これも程度のもので大金を残す必要はない。親苦勞、子樂、孫貧乏ということわざあり)物を残すは中の値打ち 人を残すは上の値打ち」と述べておられる。

「物を残すは中の値打ち」と述べておられるので、少々モノは残しておいてやりたい。「人を残すは上の値打ち」、これを

実現することは難しい。多くの人から「あの人は立派な人だった」と言ってもらえるような人生を歩んできたわけではないが、子どもたちからは「お父さんはよく生きた。お母さんはよく頑張った」と言ってもらえるようにになりたい。

2014.7.3 住民参加、わがこと 今日の日経・経済教室から

地域であれ国であれ、多くの日本人が政治や行政を「他人事^{ひとごと}」だと考えているのではないだろうか。投票率が低いのもそのあらわれだろう。「他人事度」の高さは世界有数かもしれない。以下要点抜粋

この後、筆者は構想日本の「施設仕分け」「住民協議会」の成功例を具体的に述べ「多くの地方自治体で、コンサルタントなどに委託した「公共施設白書」を作成し「見直し計画」を住民に示すというやり方が一般的だ。しかしこれでは、多くの住民が反発し、合意形成は困難だ」。

「これらの（成功）例は一言でいえば政治・行政への住民参加だ。自治体でも国でも、公聴会、タウンミーティング、パブリックコメントなど以前から様々な形で行われている。しかし、その多くが形式化しているのは（１）行政の情報提供、説明の仕方（２）住民、国民の参加の仕方（行政側からは集め方）（３）議論、意見集約の仕方のすべてが行政主導だからだ」と述べている（構想日本代表 加藤秀樹稿から）。

⇒合併自治体や人口減少自治体などで、庁舎、学校、幼稚園、スポーツ施設、図書館などの施設（ファシリティ）が多数存在し、その最適化と有効利用について、全一体的に検討し、施設の総量縮減と質の見直しが必要（ファシリティ・マネジメント）だとの認識から「公共施設白書」が作成された。しかし、総論

賛成・各論反対で、住民の合意形成が困難であることが多い。

私は、昭和54年から7年間、当時の行政管理庁・行政相談委員を務めた。当時は、住民会議運動の起こる前であったが、行政相談委員が毎年「行政懇談会」を開催して行政側に提案した。滝野社インターチェンジに公衆便所を設置すること、デイサービス事業を開始することなどが実現した。

最近、政治・行政への住民参加の手法は大きく変わったが、その多くが形式化している。その理由は筆者が指摘している通りだろう。

・「行政の役割は、住民の質問に答えた形をつくることではなく、住民が自ら考えるための情報を用意し、その議論に耳を傾けることだ。そうすれば住民は、財政のような個人の利便を超えたテーマについても「自分事^{わがごと}」として考えるようになる。議論の進め方さえ間違わなければ行政関係者が懸念するような、議論が散漫になったり要求的になったりすることはない」。

⇒住民が政治や行政を「他人事^{ひとごと}」と考えないで「自分事^{わがごと}」として考えるようになるために、住民と行政側の共同作業が必要だ。

筆者の結びは「住民、国民が政治・行政を「自分事」として考えるというのは民主主義の大前提だ。住民参加を形式的なものに終わらせず、まずは自治体、そして国の政治・行政を変える時にきている」となっている。

2014.7.13 方言とをさな名 今日の神戸新聞から

日本民俗学の創始者で、福崎町出身の柳田国男が残した一首。「をさな名を人に呼ばるるふるさとは昔にかへるここちこそすれ」

・時計の針を一瞬にして戻す。幼い頃の呼び名に加え、懐かしいお国言葉が心を優しく包んだのだろう。それから時を経て、故郷の言葉、方言を見直す動きが目立ってきたと知れば、泰斗の類はさらに緩むのではないか（「正平調」から）。

⇒NHKの朝ドラ「花子とアン」では、甲州弁の「こびっと頑張れし」が日本国中に響き渡っている。正平調子は、淡路弁をお借りして「方言も、ええでえか」や「明石の方言」を書いたブログを紹介している。

北播磨で話されているお国言葉は播州弁。あまり美しい言葉だと思わないが「べっちょない（大丈夫）」「あだける（落ちる）」などは典型的な方言だろう。

地方人同士で話す場合は、親しみもあり「方言は地域を映す鏡」であるが、公式の場では、常にキチンとした言葉を話す意識が必要だ。市長や県知事が、議会や講演の場で話される言葉は（法令準拠の堅苦しい表現が多いが）美しい標準語が多い。最近、話題になる議会のヤジは方言かも…。

方言のよいところは、相手の心を開き、本音を引き出せることだ。私は、監査の現場で「質問」するときには「方言丸出しの言葉で柔らかい雰囲気」。「総括・まとめ」をするときは、書記による筆記を意識して、法令準拠の正しい用語を用いて話すことを心がけてきた。この逆をすると真実が見えてこないように考えたからだ。

をさな名を呼び合うのは同窓会。中学、高校の同窓会では、をさな名が飛び交い、会の雰囲気をいやが上にも盛り上げる。ゼミの同窓会では、集まってくる地域が広いせいもあるが、会社言葉や役所言葉の混じる標準語になる。かつての勤務先言葉を引きずっている同窓が多い。

私のことを、をさな名で「勝彦ちゃん」と呼ぶのは、中学の同窓の「よっちゃん」と「みねちゃん」。女性からも「勝彦ちゃん」と呼ばれる。こころ安らぐひと時だ。

会議の席など大勢の前で「西村勝彦様」と呼ばれるときは構えて話す。方言とをさな名は使い分けが必要だ。つまり懐かしさと言葉のカタチは別物だと知っておかなければならない。ただ、現役を外れるとその必要もなくなるが…。

2014.7.27 今日の日経歌壇から

ねんごろの見舞ひなりしが去りぎわに人の命を測る目をせり
（吹田 林 達夫） 選者：三枝昂之

選者評：林さんは心のこもった見舞いを受けながら去り際の変化を見逃さない。測る目線と察知する視線。静かな心理劇を思わせる微妙な動きに迫力がある。

⇒選者評の冴えた筆に心が凍る。見舞いに行く方は、人伝てに病状を聞いて、ねんごろな見舞いに伺ったはず。病気の平癒、回復を祈って去ったはずなのに、命を測る目線を見逃さなかったという。

知人のお見舞いには、たとえ、ねんごろな間柄であっても十分な心遣いが必要だ。言葉を選び、笑顔で接して去りたい。人の命を測る目線など見せてはならない、一番残酷なお見舞いだ。こんな見舞いなら行かないことだ。

最近、知人のお見舞いに伺う機会が増えた。その後、亡くなった友人もいる。人は平均健康年齢を過ぎたころから平均寿命まで「何時、何が起こってもおかしくない」ときを迎える。この間も、その後も、けがをしても、病気をしても、何回となく回復する人もいる。たった1回の入院で余命宣告をされること

もある。人の命の終わりは分からない。

介護施設の従事者に聞いた話だが、看取りの最後はおおむね分かるそうだ。嘱託医、看護師、介護士らの長年の経験で「このおばあちゃんは、このおじいちゃんはもうすぐお迎えがくるね」「ご家族にお知らせしなくてはいけないね」ということになるらしい。

「看取りの現場より」(篠原慶希著)の中から「人は本当にいい時期に死ぬ」「人は自分の死に時を考えて死ぬのではないか？」の章を読み、ねんごろな見舞いなりし人の目線から「自分の命を測ることなど全く無用」だと思う。命の終わりは神さまが一番いい時を選んでくれるのだ。

2014.8.17 今日の日経歌壇から

ありがとう「有り難う」って変換をしないで送付少し近しく
(横浜 三木紀子) 選者：三枝昂之

選者評：表記の違いを生かしたところに工夫がある。「有り難い」はありそうにないという感触も帯びてしまうが「ありがとう」なら純粹に感謝。ひらがなのやわらかさも効果的。

⇒朝日新聞は、14年4月20日から、100年前の小説、夏目漱石の「ころ」を連載している。漱石の文体や100年前に使われた漢字を知るのも楽しい。「ころ」は、漱石が当時の少数エリートである旧制高校生など教養人に向けて書いた小説で内容が難しく、最後にもう一度まとめて読み直さないと理解できない。

100年前は、こんな漢字を使っていたのか…と考えながら読んでみると、「先生の遺書(八十二回)」の注に、漱石が用いた当て字のことが書かれていた。たとえば、「ひどい・非道い」を「非常い」。ワードの文字変換では「酷い」が出てくる。ほかに

「かんしゃく・癩癩」を「肝癩、疔癩」「じょうだん・冗談」を「笑談、常談、贅談」など。面白いのは、「ばけつ・馬穴」「いんき・印気」「けち・希知」「せっぱつまる、切歯つまる」などがある。広辞苑第6版では「切羽詰まる」になっている。

「ころ」を読みながら、思い出したことがある。平成12年、「滝野温泉ぼかぼ」が開業した時に作った案内看板に「播磨中央公園のそばにあります」と書かれてあった。私は「…のそばという言い方は北播磨の方言だろう」と当時の担当者であった山田さん(後に加東市副市長)に言った。「…そうですか!」で会話は終わっていた。

漱石の「ころ」では「大観音の傍^{そば}の汚ない寺の中(七十四回)」などで使われている。北播磨の方言であれば「播磨中央公園の(はた)にあります」なのかと考えると、広辞苑第6版には、どちらも「傍、端」で出ている。私は山田さんに謝らなければならない。

漢字は表記の違いで、意味も感じ方も異なる。ひらがなの柔らかい雰囲気も好きだ。柔らかいと書けば心が安らぐ。ここは漢字がよい。

2014.9.8 今日の朝日歌壇から

長女嫁し次女嫁して長男転勤す 掃除機かける面積増えおり
(仙台市 小野道子) 選者：高野公彦

選者評：子らがそれぞれの道を歩んでいて安心。でも遺された私は少し寂しい。

⇒長女、続いて次女はどこへ嫁したのか。仙台から東京か、それとも仙台近郊か。長男はどこへ転勤したのか、仙台から東京か、それとも仙台近郊か。子らがそれぞれの道を歩んでくれる

ことはうれしい。でも、その嫁ぎ先や転勤先が気になる。できることなら、生まれた地方の近郊がうれしい。

最近「消滅可能性都市」なるセンセーショナルな話題が関心を呼んでいる。

・民間有識者らから成る「日本創成会議」の分科会（座長・増田寛也元総務相）が5月に発表した独自の人口推計に基づく。子どもを産む中心的な年齢層の女性が流出し、人口減少に歯止めがかからないと分析されている。

・2040年に「20～39歳の女性人口」が半分以下に減ると予想された896市区町村あり、896には東京都豊島区や、県庁所在市の青森市、秋田市も含まれる。うち523市町村については、40年時点で人口1万人を割り込み、消滅の危機がさらに深刻とされている（時事ドットコム2014/9/5から）。

・兵庫県では、どの自治体が含まれているか（数字は2010年から30年間での20～39歳の女性人口の減少率）。

神戸市須磨区51.4、洲本市58.5、相生市55.4、三木市56.2、加西市54.7、篠山市58.7、養父市58.3、丹波市50.4、南あわじ市53.6、朝来市63.5、淡路市58.7、宍粟市55.0、多可町58.9、稲美町53.7、市川町54.7、福崎町51.3、神河町61.7、上郡町65.1、佐用町68.2、香美町63.0、新温泉町70.0。

「北播磨の田園都市」の三木、小野、加東、加西、西脇、多可では、三木市、加西市、多可町の3自治体が含まれている。人口増減には、自然人口の増減（出生・死亡の差）ばかりでなく、社会増減（流入する人口と流出する人口の差）、移民も含まれる。

・増田寛也元総務相は9日、人口減少問題をテーマに日本記者クラブで講演した。東京圏は高齢者の急増で、将来的に医療や介護に対応できなくなるとした上で「出身県に戻ったり、なじ

みの場所へ移ったり、人を外に出す対策を考えないといけない」と地方へ誘導する仕組みが必要と訴えた。

増田氏は、若年層は地方から大都市への流出が続くとして、大学の地方分散や、国家公務員を地方に手厚く配置したりすることを検討すべきだと指摘。「（地方の住民の）東京に行かなくてはいけないという意識を変えられるかどうかも課題だ」と述べた（産経ニュース2014/6/9から）。

⇒堺屋太一さんが、日経・経済教室で「高度成長期以後の工業化の過程で官僚主導による『規格大量生産』の社会風潮の中で『人生の順序』まで規格化された」と述べ「人生は、教育を受けることから始まり、その後、就業、結婚、出産。やがて定年退職、後は老後」。これが戦後日本の「ジャパニーズ・ドリームだ」と述べている。（私のブログ2014/9/1から）

小中高校を地方で終え（東京に限らず）都市部の大学へ、卒業時に都市部で就職すれば、その後、結婚、出産から定年退職まで都市部で過ごす。若者が地方の大学より、都市部の大学を選ぶのは、学問的、文化的、環境的刺激を求める限り避けられない。夏目漱石の時代から100年変わらぬ傾向だ。

老後は、できれば生まれた地方に戻りたいが、配偶者の立場もあり、意見がまとまらない。さらに、都市部で生まれた子どもは、教育も就職も、故郷まで都市部になることが多い。つまり、「地方への誘導する仕組みづくり」も「都市部に行かなくてはいけないという意識を変えること」も容易でない。人はみな、よりよい教育、よりよい生活を求めるのだから、人口の社会移動は避けられない。

また、報告書は「女性が減少し出生数が減少し人口1万人未満の自治体は消滅の危機がある」といっているが、人口1万人

未満の自治体は、経営が困難になっても、山と川と廃家だけになるわけではない。北播磨の田園都市が破たんすることもない。ただ、30年先に、現在のまま自治体が残るかどうかは分からない。定年退職後のふるさと帰郷者の増加や、都市部から田園都市部への移入の増加を図るなどなど地方にも知恵はある。ファシリティ・マネジメント（土地、建物、構築物、設備等一切の施設管理）など早くから改革を進めなければならない。

傍白

論理的に計数で裏付けられたことではないが、情緒的に述べると、地元高校を卒業し、関西圏または西日本圏の大学に進学、就職は、全国区の総合職、転勤先の勤務地で配偶者を得て子育てをする。生まれた子どもの故郷は生まれた土地、小学校から高校までの地縁・血縁ができてしまっている。配偶者の出身地もいろいろ。

郷里を出てから40年余、定年後のUターンを考えても「お父さん、お母さん、おひとりどうぞ」。つまりこのタイプの人生を送る人の生家は故郷の廃家（空き家）になる確率が高い。

それでは、どんなタイプの人々が北播磨に転入してくるか…工業団地の企業や自衛隊勤務者、そこに都会のサラリーマンを退職、自ら田舎暮らしのよさを選択し、就職先を確保して、配偶者の理解を得られたJターンやIターンの幸せな人たちが加わる。

地域人口維持の優等生は、高校卒業時や、大学卒業時に地元就職した人。生まれてから死ぬまで北播磨、理想的かも。Uターン、Iターン大歓迎。配偶者を連れて北播磨へどうぞ、このタイプが2番目の優等生、…いろいろなタイプが考えられるが、北播磨の人口が減少しない、現状維持の政策は大切だ。北

播磨の高等学校同窓会の卒業生名簿から、卒業生が今どのに住んでいるかを調査すれば、私の情緒的分析は、ある程度実証されるだろう。

2014.9.13 励ましの言葉 今日の日経から

心理カウンセラーの山崎雅保さんは、親子や夫婦、仕事の仲間などに悩む人たちのカウンセリングに従事してきた。「頑張って」と気安く相手に口にする風潮に異を唱える。

・映画を見てもよく思います。「take it easy（気楽に行こう）」「good luck（幸運を）」「have fun（楽しんで）」といっているのに、映画の字幕はどれも「頑張って」になっている。励ましの語彙が乏しく、場面や状況に応じて励ますという優しさに欠けていると思います。

⇒「頑張れ」を英語で言う場合、直訳してWork hard、Do your best、Try hard、Try harder と言いたいになるが、その場の情景を考えて話さないと全く当てはまらないことがある。初学者でもCheer up（元気出して）、Keep it up（その調子で）、Come on（もっともっと）、Hang in there（持ちこたえて）、Go for it（やりなよ）、You can do it（期待しているよ）くらいは使い分けたい。

・「頑張れという言葉は限界を超えろという意味とイコールです」「患者さんには『頑張れ』は禁句ですが、病の人によくない言葉は健康な人にも同じです」「頑張りは持続的ですが、踏ん張りは一瞬です。人生においては、ここ一番に踏ん張れるかが肝心だと思います」「『頑張って』以外にどんな言葉で励ませばいいのか」「よく僕が口にするのは『楽しんでね』とか『ゆっくりやろう』『今も十分やれているよ』といったフレーズです。とはい

え、万能という言葉はありません、大事なのは臨機応変に心を尽くし、励ます優しさだと思います」。

⇒病気やけがで困っている人には「無財の七施」を思い出し「眼施（慈眼施）—慈しみの眼、優しい目つきで人に接すること。和顔施（和顔悦色施）—和やかに、おだやかな顔つきで人に対すること」のお見舞いをしよう。看取りに入った家族には「よく生きたね。ありがとう」だけでよい。計画や事業に失敗し、自己の目標が達成できなかったことで塞ぎ込んでいる人には「まあ。ゆっくりやれや」などを用いて「頑張れ」の連呼はしない。ただ、受験生には、ここ一番、踏ん張る努力に期待と激励を決めて「こびっと頑張れ」と言ってやろう。

山崎さんが『「頑張れ」ばかり言うな。心尽くす優しさが大切だ』と言っているのはこんなことだろう。「頑張れコール」は、運動会の綱引きなどでご愛嬌でも、いつでも、どこでも通用しない。臨機応変に心を尽くし、励ます優しさを実践すれば、相手にも喜んでいただき、さらにより結果が得られることもある。

2014.9.28 今日の日経歌壇から

幼き日ボクでその後は長いこと俺で通してまだ儂じゃない

（仙台 岩間啓二） 選者：三枝昂之

選者評：俺でストップ。人生のベテランには確かに軽い。人称を示した現代人論として面白い。

⇒相撲取りの曙は「俺」、若乃花は「僕」、そして貴乃花は「私」を使っていたという。

儂はもともと男性の一人称。「私」の省略形と考えられ、「おれ」よりも丁寧とされている。選者が「俺でストップ。人生のベテランには確かに軽い」と書いているのはこのことか。「おれ

おれ詐欺」などよい意味では使われない。

私の一人称を示す話し言葉は、幼き時から今日までほとんど「僕」で通している。

そういえば、神戸の友人榊原憲司君は昔から「儂」を使う。「儂のさっかん」は彼の愛称だ。一人称に「俺」を使う友人はいない。サラリーマンであった友人は、ほとんどが無意識に「私」を使う。選者は、一人称を示す話し言葉が、「僕から俺でストップ」するようでは、「人生のベテランには確かに軽い」という。

ところで、大阪の友人は、二人称に「自分」を使う。「君は自分の言ったことに責任を持つべきだ」。この場合の自分は明らかに「君」だが、「じぶんはどう思う」「じぶん、これからの予定は？」と問われた時の「じぶん」は二人称だからおどろく。「自分」が「私」を指したり「君」を指したりしている。

もっと面白いのは、和歌山の友人は「あがら」を使う。「あがら連れもって行こらよ」といえば、「私たちと連れ立って行きましょう」の意味だ。一人称も二人称もいろいろあって面白い。それでは、人生のベテランには何が似合うのか。それは「人それぞれだ。『儂が』終着点ではない」。

2014.10.13 今日の朝日歌壇から

ぼくも非正規 きみも非正規 秋がきて牛井屋にて牛井たべる

（小平市 萩原慎一郎） 選者：永田和弘、馬場あき子

馬場あき子評：今日の若い非正規社員の嘆きが、季節は変われど何も変わらぬ牛井の味に凝っている。

⇒中国自動車道の滝野社インター周辺は、北播磨随一の大食堂街だ。規模の大きい回転寿司店、ラーメン・中華そば店、うどん屋、カレー屋、牛井屋が並んでいる。中食から夜食まで、ど

の店も満員の盛況だ。

ここに共通するコンセプトは安いということだ。牛丼屋ならワンコイン、その他のお店でも1,000円余りで店を出ることができる。だから、美味しくないとということではない。季節は変われど何も変わらぬ牛丼の味は過不足なく美味しい。私は、昼時にときどき行く。ワンコインの中食が恥ずかしいなどと思ったこともない。早くてよい。

客の中に「ほくもきみも非正規」が大勢来ているのだろう。牛丼屋を卒業する必要はないが、彼らに正規社員の道が開けることを祈りたい。

今日の日経・経済教室で、浜田宏一先生が消費増税の論点について書いている。

・分配の公正のために、消費税を引き上げず、法人税も今のままにしておくべきだという反論がある。「浜田は庶民の味方ではなくなったのか」といわれるかもしれない。

・アベノミクスにも同様に「円安で輸出大企業を優遇し、株高で金持ちを豊かにするだけで、庶民には利益が回らない」との批判もあった。しかし今多数の国民は長期の沈滞から日本経済に明るさがみえているのを喜んでいないのであろうか。

⇒浜田宏一先生は、安倍首相の有力なブレーンだが、「アベノミクスは輸出大企業を優遇し、株高で金持ちを豊かにするだけで、(牛丼たべる)庶民には利益が回らない」という批判に「しかし今多数の国民は長期の沈滞から日本経済に明るさがみえているのを喜んでいないのであろうか」とやんわり反論している。もちろん、理論的根拠をきちんと示されており、同意できる点も多い。

ただ、景気の認識を「景気は今や強気と弱気の交錯する潮目

の時期にある。次の消費税率の10%への引き上げの是非を巡る判断は、もし7～9月期の結果が思わしくないならば、増税を延期することも考えられる」と何が何でも再増税とは言っていない。学者の中でも増税派と慎重派のせめぎ合いが続いている。

アベノミクスに対する私の希望は正規・非正規みんな含めて普通の人が普通の幸せを感じる社会だ。牛丼を食べることに非正規の悲哀を感じるなど余計なことだ。牛丼は美味ければよい。

2014.11.02 今日の朝日歌壇から

歩道橋などと不便なものをつくる故街歩く人みなくなっ
てしまふ (大分 阿南尚子) 選者：穂村 弘

選者評：意外性に惹かれた。老人だけの町だろうか。

⇒歩道橋を造った当時は、交通安全対策上から必要と考えられていたに違いない。多くの通勤、通学者や買い物客などのために造ったのだろうが、街のあちこちで赤さびが目立つ歩道橋が増えているように思う。

歩道橋は造った時点から不便なものなのだ。生活強者が行政目線で生活弱者のために考えた施設だ。階段、手すりは汚れ、手袋がないと使えない。片側だけしか手すりのない歩道橋も多い。左手だけが使える人は右側の手すりは使えない。乗降に手すりの必要な人は、両側に手すりが必要だ。

50年くらい前、西宮や豊中に住み、3年間大阪市内に勤務していたが、ほとんど歩道橋を使った記憶がない。阪急梅田駅からJR大阪駅の前を通り、阪神梅田駅近くの「旭屋書店」に行くのが楽しみであった。大阪駅前には、今でも多くの歩道橋があるが、その当時から、赤信号が変わるのを待って、地上の歩道帯を使った。車優先で青信号の時間が短い不平等信号を渡る。

御堂筋など広い道路で渡りきれないときは中央分離帯で休憩した。大阪駅近辺には地下道があるが、道行く人が多く、歩きにくいのであまり使わなかった。健康な人には分からない苦労だ。

税理士になって郷里に戻り、車の運転ができるようになった。大阪へは、中国自動車道を経て、阪神高速・福島ICで降り、阪急梅田駅2階の駐車場に駐車して、1階の「紀伊國屋書店」に行った。3人の子どもを連れて何回も行った。大阪市内で行われる研修会や関与先には車でいった。この便利さが私の生活を豊かにした。

ところで、団塊の世代は2015年に65歳以上の前期高齢者になる。2025年には、4人に1人が75歳以上の後期高齢者になる。高齢になれば、疾病にかかるリスクは高くなり、要介護（要支援）になるリスクも上昇する、認知症高齢者も増える。しかも、一人暮らしの高齢者数は、男女ともに増え続け、「不便なものをつくる故街歩く人なくなる」老人だけの町も増えるだろう。

超高齢社会の問題は、主に医療や介護の問題として論じられるが、地方の生活インフラ整備の視点も必要だ。たとえば、近年、地方選挙の投票率が低下しているのは「投票所」の位置や設備が影響しているからではないか。老人には、脱靴は苦痛だし、階段、手すり、椅子などの準備も十分ではない。

「もともと不便ではないか」と考えてみる必要がある。超高齢社会は意外なところに問題が潜んでいる。物言わぬ高齢者の意を汲み取る繊細な行政感覚が問われている。

2014.11.9 今日の新聞歌壇から

嫁し来し頃永久就職と微笑^{ほほえ}みき^{いま}現在^{いま}はのたまふ定年なきと
(横浜 大建雄志郎) 選者：三枝昂之

選者評：永久就職とエンドレスの家事。妻の吐息が聞こえてくるようだ（日経歌壇から）。

⇒50年くらい前には、女が嫁すことが決まると「永久就職おめでとう」と言って祝福した。ほとんどの女性は、中学や高校を卒業して、数年の腰掛勤務を経て結婚した。少数の恵まれた女性が短大や大学に進学したが、彼女らも25歳前後で結婚した。あとは専業主婦、子どもを産み育て、家事に専念した。

子どもから手が離れた後も、職につくこともなく主婦業に専念、働くことなど考えたこともない。ラブラブでラッキーだったのは、結婚後少しの間だけ。同居の孫でもできれば、おけいこ熟や学習熟の送り迎え。後は老々介護。主婦業に定年はないが、有給休暇も残業手当もない。主婦業が労働なら完全な労働法違反だ。細君に感謝。

もうええわ、わたしお父ちゃんどこ行きたいわというて遊きたり
(鎌倉市 佐々木真) 選者：永田和宏

選者評：母親の話し言葉がいきいきと伝わる。悲しさとこれでよかったというほっとした思い（朝日歌壇から）。

⇒この女性は、後期高齢世代の幸せ者であっただろうが、この年代に専業主婦が多いことから、女性の年齢階級別労働力率がM字型の曲線となり、その上、急速な少子高齢化が重なり、日本の労働力人口が減少している。

政府は、平成22年6月に閣議決定された「新成長戦略」において、25歳から44歳までの女性の就業率を2020年までに73%とする目標を掲げ、女性の就業率向上を目指している。

しかし、難しい課題だ。女性が結婚を永久就職と考えなくなったのは、若年世代に非正規社員が増えたことにより、世の中のトレンドが変わったことによる。若者の晩婚、未婚、非婚など

批判する気は毛頭ないが、国や自治体は若者に理解を示し、自治体による婚活などという事業も行われている。妊娠中や子育て中の勤務に、短時間勤務、長期育児休暇など制度を整備しつつある。

若者の個人的な問題に立ち入るべきでないと十分承知しているが、仕事が忙しい、趣味がある、自由な時間が欲しい、わずらわしい…など理由はいろいろあるのだろう。本当は「結婚への気持ちが盛り上がらない」だけかも知れない。君たちの気持ちの変化でM字カーブ問題は解決に向かうのだ。

若者の期待する普通の幸せは、就職、結婚、子育てにあることが多い。そのために、女性は生涯「主婦ではなく兼業主婦」で職に就き続け、男性は「主夫にならずとも兼業主夫」となり、家事や育児をお互いに分担し、生涯、夫婦仲良く暮らして、人口減少をくい止めてほしい。高齢世代からの希望とお願いだ。

2014.11.30 今日の日経歌壇から

太っ腹になりし自分を笑いつつ極上鰻菰に味わう

(館林 本川みや子) 選者：三枝昂之 選者評：なし

⇒今日は兵庫県立社高校第13回生（1961年3月卒）の同窓会に出席する。中学校や大学の同窓会とは異なる面々が集まってくる。4年ぶりに会う友人から、卒業以来、何年ぶりに逢う同窓生もいるはずだ。

70歳を過ぎるとかなりの人が「太っ腹」になる。その人の気概をいっているのではなく、腹部だけが太くなることだ。私もその一人だ。

毎日の食事は、糖質カットで、朝食は食パン4分の1、後は、カット野菜と青汁、ヨーグルト、それにコーヒーだ。昼食は、軽

い弁当、ご飯は半膳くらい。夜は、魚の焼き物、煮つけ、野菜の煮込みなどいろいろだが、晩酌は毎日欠かさない。何年も続いている習慣だ。

残念なことに、体重は減少しない。最近は、6年前、3年前の病気のせいか、歩行に難儀している。もともと不自由ではあったが、実に不細工な身体つきで用心深く歩いている。

運動は、週4回、高室池スイミングプールで水中歩行、スイミングなど1時間、それ以外は、自宅と事務所のドアツードアの生活だ。ただ、週3回くらいは外出の要件があり、外食と運動、ストレス解消に役立っている。

本日お会いする同窓生にも「太っ腹」を自嘲する人はいるだろう。「末は博士か大臣か」といわれた元秀才も、今はみな普通の前期高齢者だ。大臣になった人はいないが、博士になった人は何人もいる。すばらしい学年だ。

すでに亡くなった友のことを想い、今日の同窓会に出席できることに感謝したい。西脇ロイヤルホテルの食事に「極上鰻」が出るかどうかは分からないが、久しぶりに楽しい時間を過ごしたい。

2014.12.13 地方創生のアイデア 今日の日経から

政府は地方創生関連の政策で優れた提案をした自治体にお金を優先配分する予算枠をつくる方針を固めた。年内にまとめる緊急経済対策に盛り込み、2014年度補正予算案に財源として1,000億円前後を計上する。自治体に独自の提案で競ってもらい、人口減対策を加速する。これは今日の日経・第一面の囲み記事の第一フレーズだ。以下抜粋

⇒地方自治体による「地方創生」が、解散総選挙でも大きく

採りあげられている。

「政府は26日にも経済対策を閣議決定し、新しい交付金をつくり、自治体による商品券の発行支援などを通じて個人消費を底上げする方針をすでに決めている」。商品券の発行支援などを「消費喚起枠」というが、これとは別に地域活性化に特化した「地方創生枠」を設ける方向だ。14年度補正には両者を合わせて数千億円を計上する」と記事が伝えている。

自治体による商品券の発行支援に大きな経済効果があるとは思えず、単なるバラマキに終わるだろう。私は地域活性化に特化した「地方創生枠」には関心があるので、今までに何回も書き込みをしてきた。

・提案ではベンチャー企業の育成や地方大学の活性化、大都市から地方への移住、特産品の開発支援などを想定。観光振興やコンパクトシティーづくりなどできるだけ幅広い分野を交付金の対象とする。政府は優秀なアイデアを持つ自治体にお金を傾斜配分し、経済対策で起きやすいばらまき批判も避けたい考えだ。

⇒地方創生は、「優秀なアイデアを持つ自治体にお金を傾斜配分する」ところが一番のポイントだ。すでに担当職員を任命、辞令を交付して準備している自治体も多いだろう。各自治体に（交付金を使う）アイデアを競わせ、国がその採否を決める政治手法に違和感があるが、各自治体は、しっかり頑張って「地方創生」を提案されたい。提案ゼロは、あってはならないことだ。

「地方の再生と活性化は、過疎化の問題が顕在化して以来の長年の課題である。しかし、どの政権も決定的な解決策を打ち出せずにきた。省庁の縦割りを是正し、分権を加速させることは活性化の早道にもなるはずだ。それには全国一律の施策ではだ

めだ。自治体の特性や実情に合わせたきめ細かい対応が求められている。政治がリーダーシップを発揮すべきである」（今日の神戸新聞・社説から）。同感。地方創生の本筋を衝いており、地方への応援歌だ。

傍白

私は「兵庫教育大学に「産業教育学部」を創部して、北播磨の地方創生にはどうか」と提案している。もちろん、地域の自治体で出来ることではないが、地域から提案したい視点だ。神戸港や神戸空港の整備・国際化で、神戸を日本の物流拠点にするすばらしい決意（藤井比早之議員のFbから）と同じレベルの難しい課題だ。道は遠いが地方大学の活性化は重要だ。

加東市の兵庫教育大学は、教員養成大学として設立され、多くの優れた初等、中等教員を輩出している。アジアからの留学生も多い。

今後、少子化が進み、学生数の減少が予想される。あと5年で教員採用枠は激減する（12月1日の日経）。1県1国立大学構想で、神戸大学・加東キャンパスになる可能性もある（過去の国立大、県立大などの統廃合）。

兵庫教育大学と加東市の連携は、過去30年間、いろいろ行われてきたが「地方創生」に結びついていない。イベント参加要請型の事業が多いことと、連携ポリシーの中に、「地域の下宿生を増やし、卒業生の地域就職、地域で結婚、地域で居住（マスオさん夫、落下傘妻）」の思想が薄い。他の地方国立大学の例を検討すべきだ。私立大学とは異なる国立大学の特質（経済性）の分析も重要だ。

教員以外の就職先がないと、学生時代は人生の止まり木、卒業後は教員採用試験に合格した地方（何か所も受験する人が多

い) に行ってしまう。現在、私の提案に同調者はいないが全く夢の話ではない。